

詩 編 通 読

2月



(2月 1日)「詩編 18:4~7」

苦難の中から主を呼び求め わたしの神に向かって叫ぶと その声は神殿に響き 叫びは御前に至り、御耳に届く。

(詩編 18 編 7 節)

・昨日から読み始めた詩編 18 編は 51 節まであり、詩編の中でもとても長い部類に入ります。ここではこの詩を、昨日も含めて 8 日間かけて読んでいきます。昨日は神さまに対する賛歌でしたが、今日の場面では過去の苦悩を思い返しています。

・「死の縄」、「奈落」、「陰府の縄」、「死の網」という言葉が並びます。どれをとってもわたしたちの周りにはあって欲しくない、そのようなものです。しかしそれらが絡みつき、離れていかないというような経験をしたことはないでしょうか。

・真っすぐに歩くことができない。体や心が重く、希望を見いだせない。そのようなときにこそ、主を呼び求め、神さまに向かって叫ぶことが必要なのです。わたしたちの声は必ず、神さまの耳に届くのです。

(2月 2日)「詩編 18:8~16」

主は天から雷鳴をとどろかせ いと高き神は御声をあげられ 雹と火の雨が続く。

(詩編 18 編 14 節)

・この時期、教会は「顕現節」という暦の中で礼拝をおこなっています。「顕現」とは、はっきりと姿を現すこと。あるいははっきりとした形で現れること。つまり神さまの恵みがわたしたちの前にはっきりと現されるという意味です。

・わたしたちの呼び求めに対して神さまが応えていく様子が、今日の箇所には書かれています。とても恐ろしい「怒り」の描写です。創世記や出エジプト記などで神さまが現れるときには、雷や雹や火がセットでした。

・しかし新しい約束(新約)になって、神さまは怒りよりも愛で包み込んでくださる方というイメージが強くなりました。同じように教会も、「裁きを与えるための神殿」から「喜びの幕屋」へと変えられているのでしょうか。

(2月 27日)「詩編 27:1~6」

主はわたしの光、わたしの救い わたしは誰を恐れよう。主はわたしの命の砦 わたしは誰の前におののくことがあろう。

(詩編 27 編 1 節)

・「主とともに住む望み」：救いを求める祈りです。聖歌 28 番の一節に、「わが魂(たま)の光 救い主イエスよ 近くましまさば 夜も夜にあらじ」という歌詞があります。これは詩編 27 編の 1 節を元に書かれています。

・主はわたしの光であり、救いであり、砦である。その主への信頼があるから、夜の闇も怖くはないというのです。多くの人に愛されているこの詩編 27 編は、本当の信仰とは何かをわたしたちに教えてくれます。

・さらにこの詩編の今日の部分は、周りにいる他の人たちに対してなされる信仰の告白だともいえます。そのため詩編 23 編同様、多くの聖歌で用いられています。「主の家に宿る」喜びを、共に歌うのです。

(2月 28日)「詩編 27:7~14」

心よ、主はお前に言われる 「わたしの顔を尋ね求めよ」と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。

(詩編 27 編 8 節)

・詩編 27 編の前半では、主への信頼を熱く語っていました。それに対して後半では、願いや希望を述べます。「わたしに答えてください」、「退けないでください」、「離れないでください」、「見捨てないでください」という祈りは、とても切実なものです。

・聖歌 472 番に「ここに祈りの家がある」という歌があります。3 節の歌詞を紹介します。「生かされていると知るときに 喜び悲しみ憂いをも み旨と信じて受け入れられる すべては神の愛と知る」。

・どんなに苦しい時にも、主は来てくださる。いや、苦しい時だからこそ、きっと主は来てくださる。その信頼に立つときに、わたしたちは強く、雄々しくなれるのです。主を待ち望みましょう。

(2月 25日)「詩編 26 : 1~5」

主よ、あなたの裁きを望みます。わたしは完全な道を歩いてきました。主に信頼して、よろめいたことはありません。

(詩編 26 編 1 節)

- ・「罪なき者の祈り」です。「お守りください、主よ。わたしは正しいのですから」というこの祈りは、ともするとイエス様が批判したファリサイ派の祈り(ルカ 18 : 9~14)と同じように聞こえてしまうかもしれません。
- ・この祈りは、誤って起訴された人や敵対する人に訴えられた人が、身の潔白を表明する言葉のようです。しかしあまりにも自分を正しい者として押し出しているために、間違った言葉に聞こえてしまうのです。
- ・偽る者や主に逆らう者と共に座ることをしないと宣言するのではなく、自分もそのような一人であることを感じ、そのような人とも共に座ることができればと思います。ただそうも言うておられない現実も、よく分かります。

(2月 26日)「詩編 26 : 6~12」

わたしの魂を罪ある者の魂と共に わたしの命を流血を犯す者の命と共に取り上げないでください。

(詩編 26 編 9 節)

- ・詩編 26 編 1 節には「わたしは完全な道を歩いて来ました」、11 節には「わたしは完全な道を歩きます」という言葉が出てきます。「完全無欠な自分」を神さまの前で表明しているわけです。
- ・昨日も書きましたが、自分が完全であると言えば言うほど、その言葉は間違っただけのように聞こえます。イエス様の前でユダヤ人の宗教指導者たちが叱られたように、あまりよくないもののようにも感じます。
- ・しかしある方はこの詩編を読んで、こう言われました。「これは完全さへの努力目標である」と。確かに完全な自分にはなれないかもしれませんが。しかしそこで何もかも諦めてしまうのではなく、少しでも近づけるようにする。そこが大切なのかもしれません。

(2月 3日)「詩編 18 : 17~20」

敵は力があり わたしを憎む者は勝ち誇っているが なお、主はわたしを救い出される。

(詩編 18 編 18 節)

- ・わたしたちの前に顕現された神さまは、わたしたちをとらえ、大水の中から引き上げてくださいます。「引き上げる」という意味を持った名前を持つ、旧約聖書の人物がいます。それは出エジプトの指導者であったモーセです。
- ・モーセが生まれた頃、エジプトには「生まれてくるヘブライ人の男の子はすべて殺せ」という命令が出されていました。しかしモーセの母親は、赤ちゃんをパピルスの籠に入れて茂みに隠します。そしてそれを見つけたファラオの王女は、赤ちゃんを自分の子とします。
- ・王女は水の中から引き上げたので、赤ちゃんをモーセと名付けました。「水の中から引き上げる」ことは、命を与えることです。わたしたちの洗礼も、水の中に一度死に、引き上げられて新たな命を与えられるという意味を持ちます。神さまは救われるのです。

(2月 4日)「詩編 18 : 21~25」

主はわたしの正しさに報いてくださる。わたしの手の清さに応じて返してください。

(詩編 18 編 21 節)

- ・今日の箇所には二度、「わたしの正しさ」という言葉が出てきます。神さまは正しい人に対して報い、救いをお与えくださる方だということです。この喜びの証しは、信仰告白だと捉えることもできます。
- ・神さまは正しいお方だから、わたしも正しくありたい。しかしその思いとは裏腹に、弱い自分に気づかされることも多くあります。自分の手が清いどころか、とても汚れていることも多々あります。
- ・聖公会の洗礼式の式文の中には、「神の助けによって」という言葉が多く用いられています。わたしたちは神さまの前に正しく「ありたい」と思うことが大切なのです。その思いを聞き、神さまはわたしたちを引き上げて下さるのです。

(2月 5日)「詩編 18 : 26~31」

神の道は完全 主の仰せは火で練り清められている。すべて御もとに身を寄せる人に 主は盾となってください。

(詩編 18 編 31 節)

- ・神さまは普遍的な救いを与えてくださる。それがこの詩編の作者の信仰です。では自分が救いに導かれたときには、どうすべきなのか。昔読んだ「蜘蛛の糸」という芥川龍之介の短編小説を思い出しました。
- ・ある日お釈迦様が地獄を覗いていると、そこにカンダタという男がいました。彼は極悪人でしたが、一度だけ小さな蜘蛛を助けたことがありました。そこでお釈迦様は蜘蛛の糸を使ってカンダタを助けようとしてします。カンダタはその糸につかまり上っていきます。
- ・しかし他の罪人たちも一緒に糸につかまって上って来るのを見て、「やめろ」と叫んでしまいます。そのときに糸は切れたそうです。神さまはすべての人を救いに導こうとされている。そのことを忘れないでおきたいとおもいます。

(2月 6日)「詩編 18 : 32~46」

あなたは救いの盾をわたしに授け 右の御手で支えてくださる。あなたは、自ら降り わたしを強い者としてくださる。

(詩編 18 編 36 節)

- ・「恵み深き主のほか たれかわれをなぐさめん わが主わが神 恵みたまえ ただ頼りゆく わが身を」、聖歌 464 番の 1 節です。英語では「I need thee every hour」と始まるこの聖歌は、多くの人に愛されています。
- ・聖歌の作詞者であるアニー・ホークスは、37 歳のときに「主が近くにおられる」という感情があふれだし、この詩を書いたということです。それは彼女が妻として、また母として家事に追われていた日のことでした。
- ・喜びの時も悲しみの時も、神さまはわたしたちと共に歩んでくださる。その思いの中で書かれた詩は、多くの人たちの希望となり、慰めとなっていきます。神さまはわたしたちに生きる力を与えてくださる、そのことに感謝したいと思います。

(2月 23日)「詩編 25 : 8~14」

裁きをして貧しい人を導き 主の道を貧しい人に教えてください。

(詩編 25 編 9 節)

- ・昨日も書きました通り、この詩編 25 編はアルファベットによる詞です。そのような詩が、詩編の中にはいくつかあります。しかしそのすべての詩編で、アルファベットを全部用いているわけではありません。この 25 編も「ベート」と「ワウ」と「コフ」がありません。
- ・つまりこれらの詩編の目的は文字の暗記よりも、全体を思想的に統一させていることにあるようです。「ご当地かるた」や「聖書かるた」が「あ」から「わ」を用いて、統一的な内容を伝えようとしていることに近いかもしれません。
- ・そしてこの 25 編における思想は、「主は苦しむ者、そして罪人を導かれる」ということです。罪をきれいに洗い流し、真っ白にならないと主の元に行けないではありません。罪人のままの、そのままのわたしたちを受け入れて下さるのです。

(2月 24日)「詩編 25 : 15~22」

御もとに身を寄せます。わたしの魂を守り、わたしを助け出し 恥を受けることのないようにしてください。

(詩編 25 編 20 節)

- ・詩編 25 編は、個人的な嘆願の歌です。「わたしは貧しく、孤独です」、そして「御覧ください、わたしの貧しさと労苦を」という言葉があります。「貧しい」という言葉は、山上の説教の「心の貧しい人々は幸いである (マタイ 5 : 3)」という言葉思い出します。
- ・聖書の「貧しい」とはちょっとした困窮ではなく、まったく何もない状態を指します。カラッカラ、すっからかんの状態です。神さまの恵みを求めるしか歩む術がない、すがるしかない、そんな状態です。
- ・作者は貧しく、罪深い自分であったとしても、主は必ず守ってくれると望みを置きます。そしてその願いは、最終節で民全体のものへと置き換わっていくのです。個人の祈りが、共同体を思う祈りに変わっていく。わたしたちの祈りもそうありがたいものです。 13

(2月 21日)「詩編 24:7~10」

城門よ、頭を上げよ とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。

(詩編 24 編 7 節)

- ・この詩編は、神殿の境内に神の箱（契約の箱）を入れる時に歌われていたようです。昨日読んだ前半部分では「世界の所有者は誰か」、「わたしたちは何者なのか」ということが語られ、今日の箇所では「王とはどのような方なのか」について語られていきます。
- ・「万軍の主」、それが神さまの称号です。わたしたちに先んじて歩まれ、わたしたちの敵を討ち滅ぼし、わたしたちを神さまの元に導いてくださる。ただこの考え方が、様々な誤解を生んだことも確かです。
- ・わたしたちが以前用いていた古今聖歌集にあった「立てよいざ立て」、「見よや十字の旗高し」は、今の聖歌集には入っていません。戦争を思い浮かべるからでしょうか。あくまでも神さまと共に戦う霊的な戦いなのだと思うのですが。

(2月 22日)「詩編 25:1~7」

あなたに望みをおく者はだれも 決して恥を受けることはありません。いたずらに人を欺く者が恥を受けるのです。

(詩編 25 編 3 節)

- ・「保護と罪の赦しを求める祈り」：救いを求める個人の祈りです。各節の冒頭の語句がアルファベット順に配列された教示的な詩編でもあります。冒頭の言葉をアルファベット順にすることで、暗唱を助けたと言われます。
- ・最初の場面で、手を天に向かって伸ばし、高く上げる場面が描かれます。これは嘆願の祈りの姿勢です。わたしたちは祈りというと頭を下げ、体を丸めておこなうイメージがあるかもしれません。
- ・しかしこの時代、祈りは手を上げた状態でおこなわれていました。魂を高く上げる、自らの生命をもささげるという気持ちで祈っていたようです。一度、わたしたちも試してみてくださいもいいかもしれませんね。

(2月 7日)「詩編 18:47~51」

主よ、国々の中で わたしはあなたに感謝をささげ 御名をほめ歌う。

(詩編 18 編 50 節)

- ・長かった詩編 18 編も、今日で終わりです。ちなみにこの詩編は 51 編まであって詩編の中で 4 番目に長いのですが、詩編 119 編はなんと 176 編まであります。119 編は 22 日間かけて読む予定です。みなさん、ついてきてくださいね。
- ・「主は生きておられる！」と感ずることがあります。イエス様は 2000 年前に十字架で息を引き取られましたが、復活されました。目には見えませんが、いろいろな場面で主の導きを感じることがあります。
- ・この詩はダビデが前の王サウルの手から逃れることができた、感謝の詩だと言われています。彼は何よりも神さまの救いのみ業に感謝し、み名をほめたたえます。この感謝の中でわたしたちも歩むことができれば、本当にうれしいことです。

(2月 8日)「詩編 19:1~7」

その響きは全地に その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

(詩編 19 編 5 節)

- ・「創造主の導き」：日本聖公会で用いている祈禱書には、主日礼拝で用いる聖餐式の式文の他に「朝・夕の礼拝（祈り）」、「昼の祈り」、「就寝前の祈り」といった式文も載せられています。
- ・祈禱書は日々の祈りの中でいつも用いることができるように、(本来は)個人で持つべきものですが、その昼の祈り（祈禱書 79 頁）の中で唱えられているのがこの詩編 19 編です。お昼の太陽の下で、神さまの創造のみ業を賛美するのです。
- ・旅行に行ったり、普段とは違う道を通って目的地に行ったり、そのような中で目に飛び込んでくる景色に感動することがあります。そのようなときにはぜひ、この詩編を唱えましょう。それだけで神さまを賛美する「礼拝」となるのです。

(2月 9日)「詩編 19 : 8~15」

どうか、わたしの口の言葉が御旨にかない 心の思いが御前に置かれますように。主よ、わたしの岩、わたしの贖い主よ。(詩編 19 編 15 節)

- ・この詩編は、聖歌にも用いられています。聖歌 332 番です。「星は主の栄光語り伝え 大空は み手のわざを告げる」。歌詞を読んだだけでメロディーが心に流れる、そんな方も多いのではないのでしょうか。
- ・この詩は、黙想の中で書かれたものだとも言われます。神さまの大いなる業を褒め、また神さまの正しさに触れる中で自分の小ささに気づかされていく。その中でわたしはその喜びをどう語ればよいのだろうかという詩編の作者は考えます。
- ・この詩編の最後の 15 節を、説教前のお祈りとして用いる牧師が多くいます。わたしも言葉は多少変えています、祈ります。神さまのみ業を語るには、わたしはあまりにもちっぽけです。でもどうか、わたしの口を用いてください。そのように説教者は祈るのです。

(2月 10日)「詩編 20 : 1~6」

我らがあなたの勝利に喜びの声をあげ 我らの神の御名によって 旗を掲げることができるように。主が、あなたの求めるところを すべて実現させてくださるように。(詩編 20 編 6 節)

- ・「王のための祈り」：王の詩編です。祈祷書 122 頁に、「国会、地方議会のため」、「行政のため」というお祈りが載せられているのをご存知でしょうか。「王のための祈り」というと、わたしたちの心には違和感が生まれるかもしれません。
- ・人間的な王を思い浮かべてしまうと、確かにそうですね。そのような王が戦いに勝つということは、どこかの国が敗れ、また多くの人々が傷つくということの意味するからです。
- ・しかし王にしる、国会・地方議会にしる、行政にしる、神さまがその中におり、知恵を与えてくださるようにと祈るのは、とても大切なことです。すべてのことは、「主のみ旗」の元でおこなわれるということ、心から願いましょう。

(2月 19日)「詩編 23 編」

死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける。

(詩編 23 編 4 節)

- ・「イスラエルの牧者」：神への感謝・信頼の歌です。ただわたしたちはこの「羊飼い」をイエス様に置き換え、詩編 23 編を読むことが多いと思います。羊は大変弱い動物で、自分の力だけでは生きていくことができないそうです。
- ・羊飼いが草原やオアシスに導き、敵から守り、いつも見守ってくれるからこそ、羊たちは歩いていくことができる。そしてその羊こそ、わたしたちの姿なのです。昔からこの詩編は、多くの人に愛されてきました。
- ・この詩編を元にした聖歌は 7 曲 (246、461、462、520、524、544、553) もあります。その中でも有名なものが、「飼い主わが主よ (聖歌 462 番)」でしょう。「われらは主のもの 主にありて生く」のです。

(2月 20日)「詩編 24 : 1~6」

それは、潔白な手と清い心をもつ人。むなしいものに魂を奪われることなく 欺くものによって誓うことをしない人。

(詩編 24 編 4 節)

- ・「主の荘厳な入城」：主の王権を歌った詩で、礼拝の中で用いられていたと考えられています。1 節と 2 節で世界の所有者は誰かと語り、3 節から 6 節では会衆であるわたしたちはいったい何者なのかを語ります。
- ・わたしたちのこの世界は、誰のものなのでしょう。人間は長い間、大きな勘違いをしてきました。自然や動物たちを「支配」しているのは自分たちだと考え、好き勝手に破壊や開発などを繰り返してきたのです。
- ・「すべてのものは神さまの物」、その思いを持って主の山であるシオンに向かいましょう。奈良基督教会には、シオンホールという会館があります。その場所で神さまのみ業を賛美し、主を求めていくことができればと思います。

(2月17日)「詩編22:20~26」

主よ、あなただけは わたしを遠く離れないでください。わたしの力の神よ
今すぐにわたしを助けてください。

(詩編22編20節)

・「わたしを遠く離れないでください」、その祈りは叶えられたのでしょうか。イエス様の十字架の場面を間近で見ていた多くの人たちは、イエス様は神さまに見捨てられたのだと思いました。

・しかし23節から、詩は一変して救いへの賛歌になります。神さまはおられなかったのではなく、確かに働いておられるという確信を得、感謝の祈りを唱えるのです。イエス様はそのことを知り、「成し遂げられた」と祈るのです。

・この光景を見て、一人の百人隊長は言いました。「本当に、この人は神の子だった」と。ただ苦しみを嘆いたのではなく、その中で神さまに対して信頼し、そして神さまが共におられることを知り、感謝する。イエス様はそのことをわたしたちに示されました。

(2月18日)「詩編22:27~32」

地の果てまで すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り 国々の民が御前にひれ伏しますように。

(詩編22編28節)

・「わたしの神よ、わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか」という主への嘆きから始まった詩編22編ですが、「わたしの魂は必ず命を得」という救いの確信をもって終わります。

・イエス様は十字架の上で、わたしたちの代わりに神さまを求め、嘆きの声をあげられました。しかしその行く道は苦しみではなく、救いにつながっているのだということを示してくださったのです。

・神さまを求めて救いを願うすべての人と、イエス様は十字架を通して一つになられました。この詩編22編を読むときにはイエス様の受難を覚えるとともに、わたしたちの痛み、苦しみを担ってくださる姿を思い起こしましょう。

(2月11日)「詩編20:7~10」

戦車を誇る者もあり、馬を誇る者もあるが 我らは、我らの神、主の御名を唱える。

(詩編20編8節)

・「戦車を誇り、馬を誇る」、今で言うと「核保有数を誇り、ミサイルの射程距離を誇る」ということになるのでしょうか。人々はその歴史の中で、「敵より優れた」自分たちを誇り、戦いを続けてきました。

・しかし本当の勝利は、相手が滅ぼされることでも、自分たちの名が世界にとどろくことでもありません。すべての人たちが主のみ名を唱えること、神さまをほめたたえることができれば、本当の神さまの平和が訪れるように思います。

・しかしその中で、自分の信じる「主」を押し付け、相手の信じる「主」を否定し続けてしまうと、そこには平安はありません。争いは、相手の否定から始まると思います。違いを受け入れることが、何よりも必要なのです。

(2月12日)「詩編21:1~8」

御救いによって王の栄光は大なるものになる。あなたは彼に栄えと輝きを賜る。

(詩編21編6節)

・「王のための感謝」：王の即位式に歌われた詩編です。イギリスのチャールズ国王は2022年に即位し、翌2023年に戴冠式にのぞみました。日本聖公会は英国国教会の流れを汲んでいますので、その式(礼拝)を身近に感じた方もおられたでしょう。

・式の中で黄金の冠が王の頭に置かれます。ここで大切なことは、王のすべての権威は神さまにのみ由来するということです。王は自分の力ではなく、神さまの力にすべての信頼を置くのです。

・その「神への全き信頼」を見て、人々は神さまを褒めたたえるのです。王も国も、神さまの慈しみに支えられて初めて、正しい方向に進むことができる。その関係をしっかりと心に留めて歩むこと。国の為政者だけでなく、わたしたちも覚えておきたいところです。

(2月13日)「詩編21:9~14」

御力を表される主をあがめよ。力ある御業をたたえて、我らは賛美の歌をうたう。

(詩編21編14節)

・王の即位式の最後の場面です。どうしても「敵」と書いてあると、敵国を想像してしまいます。しかし「悪い思い」や「神さまに背くこと」など、自分の弱さに置き換えて読むと、少し違ったイメージを持つことができるかもしれません。

・理想的な王とは、どういう方でしょうか。あらゆる敵を蹴散らし、自分の民に幸福を与える人でしょうか。聖書は注意して読まない、そのような「自分たちだけの救い」を求めてしまうことになります。

・実際、イエス様の時代のユダヤ人もそうでした。しかし神さまのみ心は、もっと広いところにあります。すべての人を導く王として、イエス様は来られました。その王と共に、わたしたちもまた賛美の歌を歌いたいと思います。

(2月14日)「詩編22:1~3」

わたしの神よ、わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず 呻きも言葉も聞いてくださらないのか。

(詩編22編2節)

・「僕の苦しみと国々の救い」：嘆願の詩、救いを求める祈りです。今日から5日間で、詩編22編を読んでいきます。「暁の雌鹿に合わせて」とは、当時よく知られていた歌の調べに合わせて歌うということのようです。

・マタイ福音書27:46にこのような記述があります。「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』これは、『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。」

・このイエス様の十字架上で言葉は、この詩編の冒頭のものでした。詩の最初を引用するという事は、詩全体を引用することを意味します。ではイエス様は十字架上で何を伝えようとされたのか。この詩を読みながら受け取っていきましょう。

(2月15日)「詩編22:4~9」

「主に頼んで救ってもらおうがよい。主が愛しておられるなら 助けてくださるだろう。」

(詩編22編9節)

・昨日の箇所では嘆いた作者ですが、4~6節では主への信頼を歌います。目の前の苦難に恐れ戸惑いながらも、神さまへの信頼を忘れない。十字架上でのイエス様も、そのような心境であったようです。

・「そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。(マタイ27:39)」、「神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。(マタイ27:43)」

・イエス様の十字架の場面が、この詩の中にすでに描かれています。この詩編22編を祈ることは、イエス様の受難のシナリオをなぞることです。だから復活前主日や受苦日には、この詩編を唱えるのです。

(2月16日)「詩編22:10~19」

わたしを遠く離れないでください 苦難が近づき、助けてくれる者はいないのです。

(詩編22編12節)

・この詩の12節と20節には、「わたしを遠く離れないでください」という願いが出てきます。主への信頼を語りながらも、「なぜわたしをお見捨てになるのか」という嘆きが顔を出すからです。わたしたちにも経験があると思います。

・イエス様は十字架の上で、この詩を祈られました。苦難が近づく、それは死が近づいてきたことを意味します。「彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、(マタイ27:35)」という状況も、イエス様はご覧になります。

・イエス様が苦しみの中で祈り続けられたのは、わたしたちの苦しみや祈りもその身に引き受けるためでした。「どうして神さまは応えてくれないのか」というわたしたちの思いを背負い、共に祈るためだったのです。